

おおかみをだましたおじいさん

小川未明

青空文庫



北きたの国くにの、寒さむい晩ばん方がたのことでありました。

雪ゆきがちらちらと降ふっていました。木きの上うえにも、山やまの上うえにも、雪ゆきは積つもって、あたりは、一面めんに、真まつ白しろでありました。

おじいさんは、ちようど、その日ひの昼ひる時じぶん分ぶんでありました。山やまに、息むすこ子こがいつて、炭すみを焼やいていますので、そこへ、米こめや、芋いもを持もつていつてやろうと思おもいました。

「もう、なくなる時じぶん分ぶんだのに、なぜ家うちへもどってこないものか、山やまの小屋こやの中なかで病びよう気きでもしているのではなからうか。」といつて、おじいさんは、心しん配はいをいたしました。

「どれ、雪ゆきがすこし小こやみになったから、俺おれが持もつていつてやろう。」といつて、おじいさんは村むらから出でかけたのでありました。

山やまへさしかかると、雪ゆきは、ますます深ふかく積つもっていました。小こ屋やへ着つくと、息むすこ子こは達たっし者やで仕しごと事じをしていました。

「おまえは、達たっし者やでよかつた。もう米こめや、野やさい菜さいがなくなつた時じぶん分ぶんだのに、帰かえらないものだから、病びよう気きでもしているのではないかと、心しん配はいしながらやつてきた。」と、おじいさんはいいました。

息子むすこは、たいそう喜びよろこまして、

「私わたしは、明日あしたあたり、村むらへ帰かえってこようと思おもっていましたのです。」と、おじいさんにお礼れいをいいました。

それから、二人ふたりは、小屋こやの中なかでむつまじく語かたらいました。やがて、だんだん日暮ひぐれ近ちかくなつたのであります。

「お父とうさん、また、雪ゆきがちらちら降ふってきました。このぶんでは道みちもわかりますまい。今夜こんやは、この小屋こやの中なかに泊とまっておいでなさいませんか。」と、息子むすこはいいました。

たばこを喫すいながら、火ひのそばに、うずくまっていたおじいさんは、頭あたまを振ふりながら、「俺おれは、やりかけてきた仕事しごとがたくさんあるのだから、そんなことはしていられない。今夜こんやは、わらじを五足造そくくらなければならぬし、あすの朝あさは、三斗とばかり米こめをつかなければならぬ。」と、おじいさんはいいました。

「いま時分じぶん、お父とうさんを帰かえすのは、心配しんぱいでなりません。」と、息子むすこは、案あんじながらいきました。

すると、おじいさんは、からからと笑わらいました。

「俺おれは、おまえよりも年としをとっている。それに、智慧ちえもある。まちがいのあるようなこと

はないから、安心あんしんをしているがいい。」と行って、おじいさんは、小屋こやを出でかけました。

道みちは、もう雪ゆきにうずもれて、どこが田たやら、圃はたけやらわかりませんでした。しかし、おじいさんは若い時わかじぶん分ぶんから、ここあたりは、たびたび歩あるきなれています。あちらに見える、遠方えんぼうの森もりを目めあてに、村むらの方ほうへと歩あるいてゆきました。

このとき、あちらから、黒くろいものが、こちらに向むかって歩あるいてきました。もとより、いま時じぶん分ぶん、人間にんげんが、歩あるいてこようはずがありません。おじいさんは、なんだろうと思おもっていますと、そのうちに近ちかづきました。おじいさんは、体からだじゆう水みずを浴あびたように、びつくりしました。それは、おおかみであつたからです。

おじいさんは、はじめて息子むすこのいつたことを思おもい出だしました。「おお、息子むすこのいうことをきいて、今夜こんやは泊とまって帰かえればよかつた。」と思おもつたのです。しかし、いまは、どうすることもできませんでした。

おじいさんは、じつとして、おおかみの近ちかづいてくるのを待まっていました。そして、いきました。

「おまえは、俺おれみたいになやせた、骨ほねと皮かわばかりの人間にんげんを食くつても、なんにもならないだろう。もつとふとつた、うまそうな人間にんげんのところへ、おまえをつれて行ってやるから、

おまえは、黙<sup>だま</sup>つて、俺<sup>われ</sup>の後<sup>あと</sup>からついてくるがいい。俺<sup>われ</sup>は、そのふとつたうまそうな人間<sup>にんげん</sup>を、家<sup>いえ</sup>の外<sup>そと</sup>へ呼び出<sup>だ</sup>してやるから。」といいました。

おおかみは、黙<sup>だま</sup>つていました。そして、おじいさんに、飛<sup>と</sup>びつこうとはしませんでした。おじいさんは、自分<sup>じぶん</sup>のいったことが、おおかみにわかったものかと、不思議<sup>ふしぎ</sup>に思いながら、なるたけおおかみのそばをさけて、田<sup>た</sup>や、圃<sup>はたけ</sup>の中<sup>なか</sup>を横<sup>よこ</sup>切りながら、歩<sup>ある</sup>いていききましたが、その間<sup>あいだ</sup>は生きて気持<sup>きもち</sup>ちもなく、村<sup>むら</sup>をさして急<sup>いそ</sup>ぎました。すると、ずつと後<sup>あと</sup>から、黒<sup>くろ</sup>いおおかみは、やはり、こちらについてくるのでした。

おじいさんは、懐<sup>ふところ</sup>にあるだけのマツチをすつては、火<sup>ひ</sup>をつけて、たばこをふかしながら歩<sup>ある</sup>いてきました。獣<sup>けもの</sup>は、みんな火<sup>ひ</sup>をおそれたからです。

やつと、おじいさんは、村<sup>むら</sup>のはずれに着<sup>つ</sup>きました。そこには、獵<sup>りようし</sup>師<sup>し</sup>の平<sup>へい</sup>作<sup>さく</sup>が住<sup>す</sup>んでいました。

「平<sup>へい</sup>作<sup>さく</sup>——早<sup>はや</sup>く出<sup>で</sup>ろ、おおかみがきたぞ！」と、おじいさんはどなりました。

平<sup>へい</sup>作<sup>さく</sup>は、銃<sup>じゆう</sup>を持<sup>も</sup>つて、家<sup>いえ</sup>の外<sup>そと</sup>に走<sup>はし</sup>り出<sup>で</sup>ました。そして、おじいさんの振<sup>ふ</sup>り向<sup>む</sup>く方<sup>ほう</sup>を見<sup>み</sup>て、「あれか。」といって、黒<sup>くろ</sup>いものをねらって打<sup>う</sup>ちました。

しかし、弾<sup>たま</sup>は、急<sup>きゆう</sup>所<sup>うしよ</sup>をはずれたので、おおかみは、雪<sup>ゆき</sup>の上<sup>うえ</sup>に跳<sup>おど</sup>り上<sup>あ</sup>がって、逃<sup>に</sup>げて

しまいました。

おじいさんは、自分はじぶん智者ちえしやだろうと、家へ帰かえつてから威張いばっていました。

一方、息子むすこは、こんな晩方ばんがた、おじいさんを独りひとで帰かえしたのを後悔こうかいしました。

「どうか、まちがいがなければいいが。」と、心配しんぱいをして、じつとしていることができませんでした。それで、小屋こやを出でて、父親ちちおやの後あとを追おつたのであります。

もう、あちらに、村むらの燈火あかりが見えるところであります。黒いくろ大きなおおかみが、まっしぐらに、うなりながら駆かけてきました。そしておおかみは、人間にんげんに出であうと、すぐに飛とびついて、噛かみ殺ころしてしまいました。

そのことを後あとから知しつて、おじいさんは、どんなに歎なげいたかしれません。そして、息子むすこをなくした、おじいさんは、さびしく暮くらしたのであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦ 講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# おおかみをだましたおじいさん

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>